

小児看護学実習における看護学生のキャラクターエプロン着用の試み

榊崎, 美奈子
九州大学医療技術短期大学部看護学科

大池, 美也子
九州大学医療技術短期大学部看護学科

<https://doi.org/10.15017/315>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 29, pp.67-73, 2002-02. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :

小児看護学実習における看護学生の キャラクターエプロン着用の試み

榊崎美奈子・大池美也子
九州大学医療技術短期大学部看護学科

An Attempt to Wear an Apron Uniform with a Popular Children's Character Attached in Pediatrics Nursing Practice

Minako Masuzaki, Miyako Oike

Abstract

The purpose of this study is to investigate the effects of an apron uniform with a popular children's character attached.

77 nursing students wore these apron uniforms during pediatric nursing practice. For the indexes of these effects, we used the anxious scale (AS) and the self reports (SR) by the 77 nursing students, 13 children and 24 mothers.

As a result, the emotional anxiety was lower than the cognitive anxiety by AS. Most of the nursing students reported that they used the character to talk and play with children during the pediatric nursing practice.

We suggest that an apron uniform with character attached will help to improve communication with children in pediatric care.

key words: child care practice, student nurses, apron uniform

I はじめに

小児看護学実習では、著しい成長発達過程にある小児を理解するとともに小児やその家族と関わり、必要とする看護援助を実践しながら学ぶことが求められている。しかし、少子化社会にある現代の看護学生は小児と接する機会が乏しいため、小児看護学実習においては成長発達段階に応じて異なる表現を示す小児と看護学生との関わりが困難となっている。特に、小児とのコミュニケーションや遊びを含む援助方法などに関する看護学生の不安や困難が、教育上の課題として指摘されている¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。太田らは、受け持ち患児の反応など些細な動機によって、小児に対する否定的認識を

持ったまま実習を終了する場合があることを取り上げている⁵⁾。

このため、2～3週間という短期間の小児看護学実習では、小児と看護学生との関係を深める効果的な実習指導のあり方や技術演習の工夫が求められている⁶⁾。それらに向けた取り組みとして、江本らは実習の事前学習に「おもちゃ作り」を導入し⁶⁾、岡村らは小児と看護学生のコミュニケーションに関する振り返りの強化を試みている⁷⁾。また、小児看護学実習における看護学生と小児とのコミュニケーション場面や援助場面の関わりを分析し、看護学生に対する指導方法を検討した報告もある⁸⁾⁹⁾。しかし、小児看護学実習において、

具体的な対策を試みた報告は少ない。

このような現状から、本研究では小児と看護学生との円滑な関わりを目指し、看護学生の被服を小児との関わりに影響する一つの要因として捉え、キャラクターエプロン(以下エプロンと略す。)着用による小児看護学実習を試みたので報告する。

Ⅱ エプロン導入までの過程

1) 看護学生・小児と被服

被服や外見は視覚的なシンボルであり、自己及び他者との相互作用に影響を与える¹⁰⁾。また、それらには、1) 他者に何かを伝える「情報伝達」、2) 自分自身を確認し強め、あるいは変える「自己の確認・強化・変容」、3) 他者との行為のやりとりを規定する「社会的相互作用の促進・抑制」の3つの機能がある¹¹⁾。

看護学生は、青少年期の発達段階として自己に適切な外観と行動を意識化するという特徴があり、自己概念の確立過程にある。単なる身体的保護のみならず、被服のもつ「自己の確認・強化・変容」の機能は、自己の明確な認識に何らかの変化を与えるものであり、特に看護学生の被服と深い関わりがあるといえる。

臨地実習に使用されている看護学生の被服は、教官側の意向や看護学生の嗜好を取り入れて活用されているが、そのみならず、これらの被服は看護学生としての役割や臨地実習に向けた自覚への影響もあると思われる¹²⁾。また、小児看護学実習に向けて様々な不安や困難を呈している看護学生にとって、「自己の確認・強化・変容」という機能をもつ被服は、役立つものと考えられる。

一方、小児の成長・発達過程には外的環境からの感覚や運動が影響し、特に認知や社会化の発達過程において重要といわれている。小澤らは、「乳幼児期の認知発達では、対象の認識のきっかけはまず視覚であり、思考を支配しているのは論理よりも知覚で、その場で目立っているものに目が奪われる」とし、看護者の白衣にピンク色エプロンや絵柄のワッペンを導入している。それらは、小児に親しまれる色彩や絵柄であり、幼児の不安

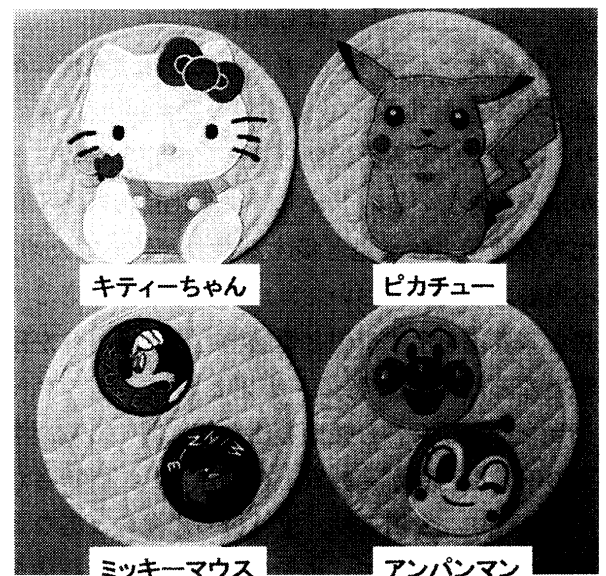
軽減と入院環境への適応に貢献できることを指摘している¹³⁾。さらに、小児の好む色彩は、年齢によって多少変化するが、ピンク色を最も好む色彩であることが明らかにされている¹⁴⁾。

小児との不慣れな関わりを中心とした小児看護学実習は、看護学生と小児の両者にとって容易なことではない。好感や安心感を小児にもたらず被服の視覚的情報は、お互いを知覚し認識するとともに、親密性を増す手がかりになるものといえる。

そこで、被服の持つ社会相互作用的機能に着眼し、エプロンを小児看護学実習に取り入れた。

2) エプロンの準備過程

小児看護学実習に臨む看護学生2年生78名を対象に、エプロンについて質問紙による事前調査を行った(有効回答54名69.2%)。その結果、エプロン着用について、小児看護学実習で着用したいと回答した看護学生は44名(81.5%)であり、着用したいエプロンの色は、ピンク色が44名(81.5%)であった。また、看護学生が好むキャラクターとして、「ポケットモンスター」「キティーちゃん」などが自由記述に記載されていた。これらの結果と幼児雑誌に関する調査を参考¹⁵⁾に、本研究に使用するエプロンの色はピンク色とし、キャラクターは、「ピカチュウ」「アンパンマン」「キティーちゃん」「ミッキーマウス」の4種類を選択した(図1)。それらの使用に際しては、各制作会社の了承を得た。



Ⅲ 研究方法

本研究では、研究1. 臨地実習における看護学生の不安に関する調査と研究2. エプロンに対する看護学生・小児・母親の意見調査を行った。両研究の研究期間は、平成12年4月17日～11月22日であった。倫理的配慮として、本研究の目的、調査方法、秘密の保持を看護学生と受け持ち小児の家族に文書と口頭で説明し、調査への協力と承諾を得た。

研究1

1) 研究の目的

看護学生は不安を抱きながら各発達領域の臨地実習に臨んでおり、このような不安は患者と看護学生のコミュニケーションを困難にする要因の一つと考える。そこで、小児看護学実習におけるエプロン着用の効果を、着用しない成人・老年看護学実習と比較し、臨地実習における不安の視点から検討する。

2) 対象

平成12年度小児看護学実習と成人・老年看護看護学実習を経験した看護学生3年生78名。(当短期大学部では10名を1グループ編成とした領域別臨

地実習を行っている。)

3) 調査内容 (表1)

質問項目は、Spielberger, C.D. (1980)が作成したテスト態度に関する検査項目を、荒木が訳して日本独自のものに開発した青年版テスト態度検査(TAI)¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾を参考にした。この質問項目を、本研究者らが実習態度におきかえて改変し、全20項目とした。作成した質問内容は、臨地実習の経験がある看護学生10名に予備調査を行った後、修正した。回答は、質問内容に関する気持ちがほとんどなかった「1」からほとんどいつもあった「4」の4段階評定方式とした。

4) 調査方法

小児看護学と成人・老年看護学の実習前後(実習前日のオリエンテーション時と3週間後の実習最終日)に、不安尺度質問項目表を配布し、実習グループごとに実施した。

5) 分析方法

小児看護学と成人・老年看護学の実習前後の不安を、t検定を用いて比較した。また、質問項目を、情動性に関連する8項目と認知的懸念に関連する8項目に分け、それぞれの不安を比較した。分析は、統計ソフトStat Viewを使用した。

表1 不安尺度質問項目

(実習前)	(実習後)
① 今回の実習は、気楽に取り組むことができないと思う	① 今回の実習は、気楽に取り組むことができなかった
② 今回の実習は、心配で落ち着かない気分である	② 今回の実習は、心配で落ち着かない気分だった
③ 今回の実習は、患者の反応が気になって専念できないと思う	③ 今回の実習は、患者の反応が気になって専念できなかった
④ 実習が始まるとコチコチになってしまうと思う	④ 実習になるとコチコチになってしまった
⑤ 今回の実習はずっと失敗するのではないかと思う	⑤ 今回の実習はずっと失敗するという気持ちでいっぱいだった
⑥ 今回の実習は、患者とどう対応すればよいのかわからなくなると思う	⑥ 今回の実習は、患者とどう対応すればよいのかわからなくなった
⑦ 患者の反応が良くないと思うと、実習に集中できなくなりそうだ	⑦ 患者の反応が良くないと思うと、実習に集中できなかった
⑧ 今回の実習はとても落ち着かないと思う	⑧ 今回の実習はとても落ち着かなかった
⑨ 実習の予習をしてもその場になると冷静にできないと思う	⑨ 実習の予習をしていてもその場になると冷静できなかった
⑩ 今回の実習はずっと不安な気持ちが続くと思う	⑩ 今回の実習はずっと不安な気持ちでいっぱいだった
⑪ 今回の実習はずっと緊張すると思う	⑪ 今回の実習はずっと緊張した
⑫ 今回の実習に対してこんなに悩まずにおれたらいいのにと思う	⑫ 今回の実習のことをこんなに悩まずにおれたらいいのにと思った
⑬ 今回の実習は緊張のため胃腸の調子が悪くなると思う	⑬ 今回の実習は緊張のため胃腸の調子が悪くなった
⑭ 実習が始まると自分はダメな人だと思うだろう	⑭ 実習中は自分はダメな人だと思った
⑮ 今回の実習は気が滅入ってしまう	⑮ 今回の実習は気が滅入ってしまった
⑯ 実習が始まるまでアレコレと思わずらうと思う	⑯ 実習が始まるまでアンコレと思わずらった
⑰ 実習が始まると、うまくいかなかった後のことをクヨクヨ悩むと思う	⑰ 実習を行いながら、うまくいかなかった後のことをクヨクヨ悩んだ
⑱ 今回の実習中は心臓がドキドキしっぱなしであると思う	⑱ 今回の実習中は心臓がドキドキしっぱなしであった
⑲ 今回の実習が終わっても、悩んでしまうと思う	⑲ 今回の実習が終わった今も悩んでしまうと思う
⑳ 今回の実習中は神経質になり、知っていることでも思い出せないと思う	⑳ 今回の実習中は神経質になり、知っていることでも思い出せなかった
回答 1. ほとんど思わない 2. ときどき思う 3. しばしば思う 4. ほとんどいつも思う	回答 1. ほとんどなかった 2. ときどきあった 3. しばしばあった 4. ほとんどいつもあった

6) 結果

質問表の有効回答率は、小児看護学実習前後ともに96.2%，成人・老年看護学実習前97.4%，実習後95.5%であった。

小児看護学実習前の不安尺度の平均値は42.7(±12.06)，実習後は38.3(±12.36)であり，実習前後に有意差を認めた(p<0.05)。成人・老年看護学実習前の不安尺度の平均値は47.2(±12.8)，実習後は42.8(±12.78)であり，実習前後に有意差を認めた(p<0.01)。また，実習前及び実習後では，小児看護学と成人・老年看護学の比較において有意差を認めた(p<0.05)。(表2)

小児看護学の情動性不安尺度の平均値は，実習前16.8(±5.17)，実習後15.3(±5.2)であり，実習前後に有意差を認めなかった。認知的懸念不安尺度の平均値は実習前17.7(±4.89)，実習後15.7(±5.09)であり，実習前後に有意差を認めた(p<0.05)。情動性と認知的懸念2群間の比較では，実習前後ともに有意差を認めなかった。また，情動性不安尺度では，実習前後の小児看護学と成人・老年看護学の比較において有意差を認めた(実習前p<0.01，実習後p<0.05)。認知的懸念不安尺度では，実習前後の領域別比較において有意差を認めなかった。

成人・老年看護学の情動性不安尺度の平均値は，実習前19.1(±5.45)，実習後17.2(±5.45)で

あり，実習前後に有意差を認めた(p<0.01)。認知的懸念不安尺度の平均値は実習前18.6(±5.19)，実習後16.9(±5.23)であり，実習前後に有意差を認めた(p<0.01)。情動性と認知的懸念2群間の比較では，実習前後ともに有意差を認めなかった。(表3)

研究2

1) 研究目的

看護学生，小児，母親を対象に，小児看護実習におけるエプロンの活用状況を明らかにする。

2) 対象と調査方法

調査対象を(a)平成12年度小児看護学実習を経験した看護学生78名中エプロンを着用した看護学生77名，(b)5歳以上の受け持ち小児13名，(c)受け持ち小児の母親24名とした。

(a)では，自由記述式及び一部選択式の質問紙による留め置き調査法を実習最終日に実施した。選択式項目はエプロン着用時の気持ちと小児や母親とのコミュニケーションに関する内容で複数回答とした。

(b)では，キャラクターの好みや看護学生の着用しているエプロンの印象について構成的質問紙による面接聞き取り調査法を実習最終日に実施した。

(c)では小児の表情や言動，エプロンを着用し

表2. 小児看護学と成人・老看護学実習前後の不安尺度

	n	実習前		n	実習後		
		mean ± SD			mean ± SD		
小児看護学	75	42.7 ± 12.06	*]	75	38.3 ± 12.36	*]	*
成人・老年看護学	152	47.2 ± 12.8		149	42.8 ± 12.78		**

*p<0.05 **p<0.01

表3. 小児看護学と成人・老年看護学実習前後の情動性不安尺度と認知的懸念不安尺度

		n	実習前		n	実習後		
			mean ± SD			mean ± SD		
小児看護学	情動性	75	16.8 ± 5.17	*]	75	15.3 ± 5.2	*]	*
	認知的懸念	75	17.7 ± 4.89		75	15.7 ± 5.09		
成人・老年看護学	情動性	152	19.1 ± 5.45	*]	149	17.2 ± 5.45	*]	**
	認知的懸念	152	18.6 ± 5.19		149	16.9 ± 5.23		

*p<0.05 **p<0.01

た看護学生の印象について、自由記述式の質問紙による留め置き調査法を実習最終日に実施した。

3) 分析方法

(a)の選択式項目の回答は単純集計を行った。(a)(c)の自由記述式項目と(b)の回答は、コミュニケーションへの影響を視点とした分析を行った。

4) 結果

(a)エプロン着用に関する看護学生の意見

調査の有効回答率は87%であった。受け持った小児延べ67例の年齢は、2か月～18歳、コミュニケーションに影響する精神発達遅滞を伴う疾患は7例(10.4%)であった。エプロン着用による看護学生の気持ちは、楽しい71.6%、うれしい47.8%であった(図2)。エプロンの活用内容を看護学生と小児との関わり場面からみると、話のきっかけになる79.1%、小児の関心を知る58.2%、話題が広がる、スキンシップがとりやすい50.7%であった(図3-1)。母親との関わりでは、話のきっかけになる50.7%、話題が広がる25.4%、情報収集が容易6%であった(図3-2)。

自由記述では総数166件のコミュニケーション

に関する記述があった。コミュニケーションに役立つとした具体的記述内容は、受け持ち児以外の小児とのコミュニケーション、話や遊びのきっかけを作る、処置で啼泣している小児に対しては、キャラクターへ気を引くなどであった。看護学生が捉えた小児の反応に関する記述は98件であった。内容は、キャラクターの名前を言う、キャラクターを見る・追視する、小児から話かける、小児が近づく、小児が指を指すであった。

(b)エプロンに対する小児の意見

小児の13名中9名はエプロンが好きと回答した。感想は、かわいい、キャラクターが付いているほうが良い、何も思わない、などであった。

(c)エプロンに対する母親の意見

エプロンを着用している看護学生を見た小児の反応について、母親の意見は、喜んでいて、話かけていた、中学生なので特に気づかないなどであった。看護学生に対する印象は、小児科らしい、親しみがある、好感が持てる、恐怖心が和らぐ、男女や年齢の違いを考え着用してほしい、などであった。

V 考察

当短期大学部の看護学生は、小児看護学と成人・老年看護学の実習領域を問わず臨地実習前に不安な状態であり、実習終了後には不安が軽減していることが明らかになった。

そのなかで、小児看護学実習の不安は実習前後に有意差を認めた。これは、保育園あるいは病棟における小児看護学実習前後の不安についてSTAIを用いて測定した田辺¹⁹⁾や鳴尾²⁰⁾の結果と一

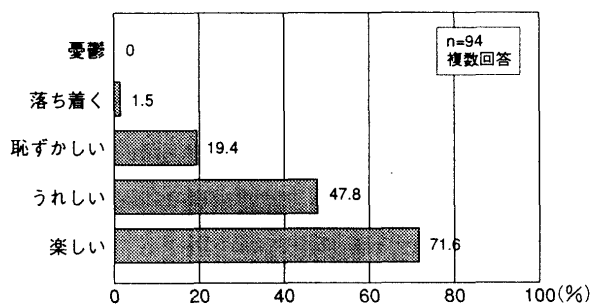


図2. エプロン着用時の看護学生の気持ち

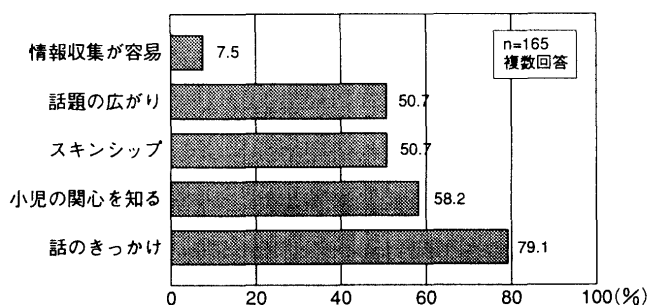


図3-1. 看護学生のエプロン活用の内容 (小児との関わり場面)

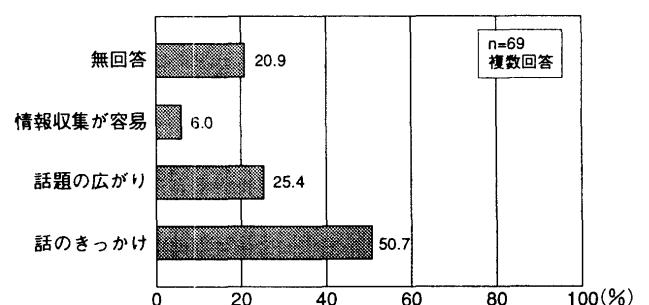


図3-2. 看護学生のエプロン活用の内容 (母親との関わり場面)

致するものであり、実習への不安があることが確認された。このような実習に対する不安の軽減に向けて、小児との直接的な関わりを促進できる教材開発の必要性は高いといえる。

小児看護学実習に対する看護学生の不安は、成人・老年看護学実習と比べて低く、小児や成人という対象の相違がもたらす不安への影響は少ないと考える。小児看護学実習で看護学生に生じる不安やストレスの要因は、家族や指導者との関わりあるいは実習記録、看護技術など学習課題に関する多くのことが含まれており³⁾²¹⁾、少子化社会における小児との関わりの少なさを、不安の要因として特定できないと考える。

小児看護学実習と成人・老年看護学実習の情動性不安尺度によると、看護学生の小児看護学実習に対する落ち着かないあるいは緊張するという情動に関わる不安の低さが明らかになった。また、小児看護学実習前では、情動性の不安は、認知的懸念の不安と比較して低い。エプロン使用に関する事前調査の結果では、その着用に対する看護学生の期待が含まれていた。このような期待が、実習前の看護学生の不安に影響したのではないかと考える。

本研究では、前述してきた不安尺度による変化とエプロンとの関係を捉えることはできないが、明るい気持ちで着用していたという記述内容から、エプロンは看護学生の情緒面に肯定的影響を与えていたと考える。

エプロンを着用した看護学生は、小児や母親と話をするきっかけとしてエプロンを活用していた。統一された看護学生の実習衣の着用には、集団意識を高めるなどの利点があるが、複雑な成長・発達過程にある小児あるいは見知らぬ家族と初めて話をする上で、個々の看護学生の自己表現に役立つものとはいい難い。看護学生自身が選択した今回のキャラクターには、小児と家族に対する話題の共通性が含まれており、会話を意識的に引き出すことができる手がかかりになったと考える。このことから、実習における看護学生の不安の要因でもある小児や母親とのコミュニケーションに影響する可能性がエプロンにあるといえる。

このような話のきっかけとともに、看護学生は小児との遊びにおいてエプロンを活用していた。小児にとって遊びは本質的なものであり、小児の喜びや安心感をもたらし、親近感へとつながる。エプロンは、看護学生との単なる挨拶のみならず、会話を発展させ、小児との関係構築に一層役立つと考える。

また、処置で啼泣している小児に対しは、キャラクターへ気を引きエプロンを活用していた。エプロンは、小児と家族に対する相互関係をつくるきっかけとして役立つのみならず、実際の看護活動の手段としても活用できることが示唆された。

看護学生が捉えた小児の反応に関する記述は、全記述件数の59%を占めており、小児から話かける、近づくなどのエプロンへの関心から看護学生に接近する記述があった。小児にとって馴染み深いキャラクターは、看護学生を好意的に受けとめ、このように接近する小児からの行為は、看護学生のコミュニケーションの困難さに役立つと考える。さらに、視線の動きなど小児の細かい反応の記述もあり、看護学生はキャラクターを通じて小児を観察し、言語による表現が未熟な小児の反応を捉えていることが伺えた。

しかし、小児の成長・発達に関する情報収集が容易であるという回答はわずか7.5%であった。エプロンの着用は、小児と母親との話のきっかけとして活用されているが、コミュニケーションの媒体として発展させ、看護実践の手がかりを得る手段としては活用されていない。

それとともに、小児の発達段階や疾病によっては、エプロンの持つ情報伝達が困難な臨床状況もあり、また、小児が興味を示さないあるいは小児の年齢を考慮したキャラクターを取り入れてほしいという意見もあった。小児の発達段階や個性性を考慮したキャラクターの選択と活用も今後必要と考える。

VI まとめ

小児看護学実習において、当短期大学部看護学生のエプロン着用が、看護学生と小児・母親との関わりに与える影響について、不安尺度及びエプ

ロン着用に関する看護学生と小児・母親の意見調査から検討した。

- 1) 実習領域を問わず、臨地実習前の看護学生は不安を示し、そのなかで小児看護学実習前は、成人・老年看護学実習より低い不安を示した。
- 2) 小児看護学実習の情動性不安は、認知的懸念の不安より低く、エプロン着用による影響が示唆された。
- 3) 看護学生のエプロン着用は、話や遊びのきっかけ作り・看護活動に役立っていた。
- 4) 看護学生のエプロン着用によって小児からの接近と看護学生の観察場面が捉えられ、エプロン着用は対象理解に役立つことが示唆された。

《付 記》

本研究の一部は、2001年3月に実施された第5回日本看護研究学会・九州地方会において発表した。

VI 参考・引用文献

- 1) 河合洋子他：小児看護学実習評価と実習直前・直後における学生の不安，名古屋市立大学短期大学部紀要，6，31-38，1994
- 2) 久保田まさ代他：小児看護実習における学生の不安についての一考察，医療増刊，50，284，1996
- 3) 吉田礼子：小児看護実習におけるストレスと学生の経験，日本看護学教育学会誌，7(2)，124，1997
- 4) 江本リナ他：小児看護学実習を行う学生に関する研究の動向と今後の課題，日本看護学会論文集30回，看護教育，32 - 34，1999
- 5) 太田には他：小児看護実習終了後の小児に対する学生の認識と課題，看護教育，20回，73 - 76，1989
- 6) 江本美沙子他：小児看護学実習の事前学習として「手作りおもちゃ」の演習を計画しての一考察（その1），看護教育，22回，278 - 280，1991
- 7) 岡村千鶴他：小児看護学実習におけるコミュニケーション能力が向上するための指導方法，看護教育，24回，40 - 42，1993
- 8) 松山みどり他：小児看護学実習におけるコミュニケーションの傾向 — プロセスレコードの分析 —，九州国立看護教育紀要，3巻，1号，22 - 30，2000
- 9) 中島登美子他：小児看護臨床実習における学生と子どもの関係形成，看護教育，24回，156 - 159，1998
- 10) Susan B. Kaiser, 高木修他監訳：被服と身体装飾の社会心理学，北大路書房，p.i，1997
- 11) 中島義明他：まとう — 被服行動の心理学 —，p29，朝倉書店（株），1996
- 12) 前掲上10)，p134 - 138
- 13) 小澤明美他：看護衣の色と絵柄に対する幼児の入院初期反応，臨床看護研究の進歩，7，109 - 115，1995
- 14) 赤井智早他：児の好む色を調べて，クリニカルスタディ，20（5），400 - 404，1999
- 15) 畠中貞行：子どもと本と親と — 編集の現場から —，チャイルドヘルス，12(3)，175 - 177，1999
- 16) 堀洋道他：心理尺度ファイル — 人間と社会を測る —，p604 - 607，垣内出版（株），1996
- 17) 荒木紀幸：青年版テスト態度検査(TAI)の標準化に関する研究，日本教育心理学会第30回発表論文集，480 - 481，1988
- 18) 荒木紀幸他：青年版テスト態度検査(TAI)の標準化に関する研究(Ⅲ)質問項目の再検討，日本教育心理学会第34回総会発表論文集，185，1992
- 19) 田辺恵子：小児看護学実習におけるストレス反応の分析，日本看護学教育学会誌，3(2)，70 - 71，1993
- 20) 鳴尾悦子：保育園実習における学生の不安と認識の変化，日本看護研究学会雑誌，19，4，125 - 126，1996
- 21) 大木伸子他：小児看護実習を問う，小児看護，21(12)，1650 - 1659，1998